

# イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授  
小田島 恒志

(第26回)

## ロンドンでの待ち合わせ

12年前、7月7日の地下鉄・バス同時多発テロ事件からそれほど経っていない時期に、ロンドンの中心部でパキスタン系イスラム教徒の劇作家シャン・カーン氏に会った話は以前書いた。この時驚いたのは、彼の外見がその出自ゆえに事件の犯人一味とよく似ているにもかかわらず、道行く人が誰も彼を避けたり睨んだりしていなかったことだ。連れの僕もどこからどう見てもアジア的なルックスで、二人でいたら警戒されてもおかしくないのだが — これに先立つ数年前のアメリカの「9.11」では、事件後そういう肌の人たちが随分阻害されたと聞いていたので — この時のロンドンの人たちの平然とした反応が意外だった。

だが、もっと意外だったのは、カーン氏自身の無防備なまでの屈託のない明るさである。大英博物館の前、という如何にもテロリストが狙いそうな人ごみの中で、彼はいきなり、「そうだ、一緒に写真を撮ろう」と言い出して、近くを通った人に「すみません、写真撮ってくださいませんか？」とカメラを渡し、ポーズを取ったのだ。彼も、写真を頼まれた人も、つい先頃そういう事件があったことなどまるで意に介さないように。もちろん、普段から様々な肌の色の人が混在している町なのだから、当然と言えば当然なのだが、それにして

もあまりにも自然な振る舞いだった。

そもそも彼に会う瞬間に僕は失敗していた。「WEB上の写真であなたの外見は分かっているので、待ち合わせ場所では僕の方から見つけますよ、もしあなたが髪形を変えてなければ」と、写真で見事なスキンヘッドへの敬意を込めて電話で伝えてあったのだが、彼は大笑いして「うん、変えてないよ、じゃあそこで」と答えていた。ところが、会ってみると、いわゆる手入れによるスキンヘッドではなく、ただ薄かったのだ（後ろには髪が生えている）。なんてことを言ってしまったのだらう・・・だが幸い、僕もかなり進行している（いや、後退している）ほうなので、お互いすぐに打ち解けることができた。

この7月にロンドンへ行った際、12月に東京で上演する『欲望という名の電車』の演出家フィリップ・グリーン氏とカフェで会うことになった。カーン氏への失言を思い出し、余計なことは言わずに待ち合わせ場所のカフェへ行ってみると、真ん中のテーブルに「日馬富士」の絵入りのTシャツを着たイギリス人が座っていた。なんて分かりやすい・・・いや、先場所優勝したことを思うと、もしや予知能力の持ち主では？